

コルチャック先生の選択 大学での授業実践の試み

一教職課程“道德教育論”授業者模擬授業の試み一

An Experiment of Teaching about Moral Education — The Korczak's Selection in his life history —

塚本 智宏¹

Chihiro Tsukamoto²

要旨

本報告は、これまで筆者が2012年より行ってきたヤヌシュ・コルチャックの「最後の行進」に関わる大学での授業実践についての報告である。ヤヌシュ・コルチャック、本名ヘンリク・ゴールドシュミット(1878年-1942年)は、20世紀の前半ポーランドで医者・作家・孤児院の院長として活躍した人物で、しばしば子どもの権利条約の精神的父と名付けられ、子どもの人権思想すなわち”子どもの人間としての尊重”の思想を生涯においても貫いた人物である。筆者はこれまで彼の生涯や思想を研究してきたが、これらをコンパクトに学生に伝える授業を模索している。ここで紹介する授業は、教職課程の学生を対象に各自の道德授業を作成する課題に関連して、授業者がそのひとつの模擬授業として学生を前に自身で授業を実践しているものであり、関連授業を中学校や高校で実践する教員をはじめとする授業者からのご意見・ご批判をいただくことを目的としている。

キーワード: 道德授業、最後の行進、コルチャック、大学授業実践

はじめに

本論は、これまで筆者が数年、大学教職課程(中学・高校の教員免許取得のため)の授業、道德教育論の1コマにおいて実施してきた授業の授業内容についてこれに若干の考察を加えて報告するものである。道德教育論の授業は、教職課程の2年目の学生に、全体として、前半の道德教育の歴史と理論・方法について行われる授業を踏まえて、学生たちが後半において行う模擬授業のいわば「模範」として、様々な授業紹介(その作成や指導案の作成方法を含め)を行うのだが、その中の一コマが、私のオリジナルな道德授業である。この教材を作成するにあたって、自ら発表して来た著書や論文をもとに作成している(論文末参考文献・論文参照)。

コルチャックは、我が国では、1990年代初めに映画『コルチャック先生』で一挙に知識人や教育者たちの知るところとなった。この映画は、著名なポーランドの映画監督アンジェイ・ワイダによるもので、コルチャック晩年1930年代末の国営ラジオ放送番組の担当パーソナリティーから降板されることから始まり、1942年8月ワルシャワ・ゲットーの中で子どもたちと共に進む「最後の行進」とい

¹ 東海大学(札幌キャンパス)課程資格教育センター教育学研究室, 005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1; E-mail: tukamoto(a)tspirit.tokai-u.jp

² Liberal Arts Education Center, Sapporo Campus, Tokai University, 5-1-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan; E-mail: tukamoto(a)tspirit.tokai-u.jp

う悲劇の舞台へと一気に展開し、その最後「貨車」に乗り込むところでクライマックスを迎える³。この「行進」に関わってその直後から数多くのコルチャックの実像・虚像が数々の証言を伴って形成されていくことになる⁴。最後の瞬間に、コルチャックは子どもと共にトレブリンカに向かっていくことを(死を)選択したのだという。そして、その行進はナチス・ドイツに対する無言の抵抗であったという。紹介する本授業の最後はこの時点のコルチャックの思考や行動を考えさせるところで終わる。

本授業の展開は、① コルチャックの誕生から学生の時期の職業・将来選択(資料A-資料①-④に基づく導入)、そして、② 医者から孤児院院長への人生選択・転身(資料A-資料⑤-⑦)、さらに、③ 彼の教育(養育)実践と子ども人権思想の学習、最後に、④ ナチス・ドイツのポーランド侵攻とコルチャック最晩年「最後の行進」と彼の最後の選択(資料A-資料⑧)の意味について考える展開となっている。この授業のねらいは、資料Bの「題材観」に記したように、その人生の前半において子どもを人間として尊重する思想を形成しまたそれを実践し、さらに、これを最後の人生の選択において貫いたという意味で、子どもという人間(そして命)の尊重が生徒や学生に強いインパクトを残し、人間の生き方としての一つの範を示してくれるところにある。このねらいが達成され得るのかどうかについては、本論の最後の**むすびにかえて**において学生の感想文を紹介しながらまとめておきたい。

なお、この道徳授業を行う場合に、並行してというより前提として、ホロコーストに関する歴史授業を行うことが不可欠と考えている。コルチャックと子どもたちの「最後の行進」が何故起こっているのかを理解するためには少なくとも1942年1月のヴァンゼー会議以降のヨーロッパの各地で、やはり子どもをめぐる事件がほぼ同時に起こっており、その中の一つの事件という認識もあわせて必要だと考えているからである。ここでは紙数の関係もあり、レジユメ的に学習事項を列挙するにとどめる。

ホロコースト歴史の授業計画

1. 1920-30年代ドイツでのナチス政権の成立の背景

第一次世界大戦と敗戦国ドイツ

ナチス・ドイツの政策

人間の価値 安楽死政策からユダヤ人迫害まで

ホロコーストによる死者 ゲットーから絶滅収容所へ

2. ユダヤ人差別の歴史とナチスの政策

ユダヤ人の子どもの目からの差別の例

「突然プールに行けない」「ユダヤ人として立たされる生徒」「いなくなった生徒」

以下、ドイツ ②チェコ ③フランス ④オランダ ⑤ポーランド

① 1942年1月 ヴァンゼー会議と絶滅計画と実施

② 1942年5/27 ラインハルト総督暗殺事件とリディツェ村事件へウムノ92人子殺害

③ 1942年7/16-17 黄色い星をつけた子どもたちヴェルディヴ事件 1942年7/16-17

④ 1942年7/6 隠れ家のアンネ(アンネの日記) 姉召集を機に「隠れ家」生活の開始

⑤ 1942年8/6 コルチャックと子どもたちの死

³ 本映画ビデオ・DVDは入手が困難であったが、その後2012年の国際コルチャック年を機にDVDが作製され購入が可能となっている(発売マーメイドフィルム)。教材としての使用が可能である。

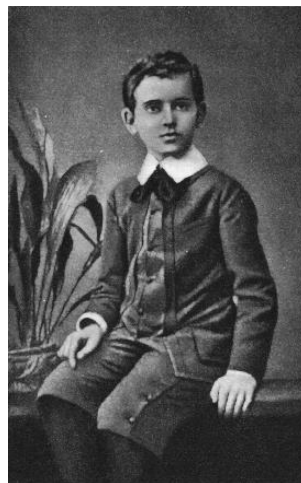
⁴ この最後の行進に関わる数々の証言についてはこれまで、筆者には何度か報告の機会があったが、すでに邦訳の文献によってでも多数の異種の証言を拾うことができる。ポーランドやドイツでの研究を補いながら、それらの証言についてまたその意味について当時の歴史に照らしながら、機会を見つけてまとめてみたいと考えている。

資料 A

授業: コルチャック先生の選択 資料とワークシート 組 氏名



資料①



資料③

ヤヌシュ・コルチャック (1878-1942)

資料② コルチャック先生の 医学の専門は?

(外科・内科・産婦人科・小児科) のどれか。まるをつけよ。

資料④ コルチャック先生の子ども時代 その夢と選んだ仕事

コルチャック先生は比較的裕福な家庭に生まれ、あまり外では遊ばせてくれない家庭に育ちました。窓から見る通りで遊んでいる子どもたちのことをうらやましく思っていたようです。そんな彼の中学生の頃の日記には、友だちたちとその家庭の資料を集めて子どもの研究をしたいとあります。これは14歳のときですが、当時有名だった教育家“ペスタロッチやフレーベルといった人たちと自分の名が将来一緒に並ぶだろうか”といったことを夢に見ていました。こんなふうに教育家になりたいとも思っていました。16歳のときに父親が亡くなり家計が苦しくなり、高校くらいの年齢から家庭教師や作家の活動をはじめ、姉や母親らの生計を維持しました。ヤヌシュ・コルチャックというのは実は作家としてのペンネームで、本名は、ヘンリク・ゴールドシュミットといました。彼はユダヤ系のポーランド人だったのです。大学への進学はおそらく選択を迷ったと思いますが、結局医学の道を選択し卒業後はお医者さんになり、8年ほど小児科病院に勤めた後、彼は人生の大きな転換を図ることになります。

資料⑤ コルチャック先生の 人生の選択

a. 1910年前後、ベルリン、パリ、ロンドンへ留学した。その後に書いていること。

「子どもの偉大なる総合。それこそが、私がパリの図書館で、興奮で顔を赤らめて、・・・夢見たものだ。」(1918『子どもをいかに愛するか』より)

b. 「医者であり魂の彫刻家でありたいという野望」があった。

(1942年ゲットー『日記』より)。

20世紀初頭ヨーロッパは、いろんな領域で子どもに関心が集まっていました。医学では小児科国際学会がはじまり、教育学では新教育運動といって児童中心主義の教育運動が起こり、法律では大人社会の悪い影響や工場労働などから子どもを守るための児童法という法律をつくる動きが現れたりしました。さらに子どもの心と体をトータルに解明しようとする児童学という学問をつくる動きもありました。

このように、子どもをばらばらにいろんな角度から研究する動きがありましたが、そんな中で、子どものことを知りたい、子どもとは何かということ「総合的」にとらえようということ、これをコルチャック先生は夢見ていました。孤児院というところは朝も夜も子どもたちと一緒に生活することができ、そして観察も研究もすることができるのです。それに何より医者をやっているながら考えていたこと、それは、医者は子どもを体の面で診てあげられるけれど、心の面での支えをすることはできないということでした。こんなことが考えられた結果、お医者さんの世界から子どもの世界に踏み込んでいったのです。子どもの頃の夢にもどって教育家になる夢を実現しようとしたのかもしれない。

問① コルチャック先生は、孤児院のなかでどんな先生だったでしょう。また、子どもたちについてどんなことを考えていた人なのでしょう。それらを考えるヒントが以下にあります。まず一つ目。

コルチャック先生が1918年頃『子どもをいかに愛するか』という本の中で子どもの権利の一例として書いていたことですが、次の空欄にはどんな言葉が入ると思いますか。

「子どもは自分の悲しみ、たとえば ○ (ヒント漢字ひとつ) を失くしてしまったときなどの悲しみに対して、尊重を求める権利を持っている。また自分の望み、たとえば冷え込みの厳しいときにコートなしで外を歩きたいなどという望みに対して、尊重を求める権利を持っている。そして一見○○○○質問に対しても尊重を求める権利を持っている。」(ヒントひらかな)

問② 次の空欄も考えてみましょう。孤児院の中でトラブルを解決するためのしくみで、「仲間裁判」というのがありましたが、その土台となった法典の前文には次のようなことが書かれていました。コルチャック先生と子どもたちでつくりあげたきまりです。空欄には何が入ると思いますか。

「もし誰かが罪をおかしたなら、一番良いことはその子を○○ことだ。もしそのことを知らなくて、罪をおかしたなら、その子はもう既にわかっている。もしうっかり罪をおかしてしまったのなら、その子は今後より慎重になるだろう。ほかのやり方に慣れていなくて罪をおかしてしまったのなら、その者は慣れるように努力するだろう。もし仲間に説き伏せられて、罪をおかしたのなら、その子はそれ以上彼らの言うことを聞かなくなるだろう。

もし誰かが罪を犯したなら、一番いいのはその子がたちなおることを期待して、○○ことである。」 ヒント漢字とひらかな

資料⑥ コルチャック先生の思想 ―子どもの悲しみや望みや質問を尊重してもらおう権利―

コルチャック先生は、子どもというものは、いくら小さくとも大人とは同じく人間として大事にされる存在だと考えていました。そのためにまず強調したことが、子どもはこれから人間になるのではなく、今すでに人間であるという考え方でした。でもものごとの感じ方や考え方に知識の量や経験が大人と子どもでは大きく異なります。その違いのことを大人はきちんと知り理解することが必要で、子どもと一緒に生活し生きるためには、子どもの感じ方に共感して、子どもの見方・考え方もものごとを考えてみる必要があるのだ!! それこそが子どもを人間として尊重することだという考えを主張していました。(子どもにとってはとても大事な)石ころをなくしたことを悲しむ子どものことを尊重すべき…というのはそれを説明するための良い例だったのです。もっと率直に、子どもには「尊重される権利」があるということを社会に強く訴えていました(彼の子どもを一個の人間として尊重する思想は子どもの権利条約の中に受け継がれていくこととなります)。また、彼は、訴えていただけでなく日常生活では、彼の孤児院の子どもたちを人間として大切に付き合う方をしていました。問①の解答 石・ばかげた

資料⑦ 孤児院のなかで教えようとしたこと。そこには子どもの仲間裁判というものがあり、罪や失敗や間違いをおかしたときにどんなふうに解決したかを調べるとわかります。

子ども達の毎日の生活のなかで、何かの失敗や過ちというのは子どもには避けられないことだとコルチャック先生は考えていました。そして必ずそこには理由があるのです。大人と同じように。でも、ここで大事なことは、許すとは、単に罪をおおめに見てやるということではありません。仲間裁判法典の前文に書いてあることですが、そこに「その子がたちなおることを期待して」とあるように、立ち直ろうとする友達を信頼するということでした。法典はなんと1条から1000条まであったそうですが、これを順に見ていくとわかりますが、最後の最後まで、仲間は、過ちをおかした仲間に対して、その子が立ち直ること、また、変われる自分自身を大事にすることを互いに願い要求し続けています。裁判と名がついていますが、友達を訴え裁くのではなく、この自治のしくみを通じて、何よりも「仲間」としての信頼関係をつくることをめざしていたのです。問②の解答 許す

もうひとつ、この裁判では、子どもが先生の過ちを訴えることもできました。コルチャック先生はそのことで先生たちが子どもに対して丁寧に対応するよう望んだだけでなく、知らず知らずのうちの大人の傲慢さや気まぐれやへ理屈でもって子どもを抑えつけてしまうような態度、教師の体質を子どもたちに直してもらうためにも必要と考えていました。これは、深いところで先生たちと子どもたちとの間の信頼関係をつくることになったと思います。

資料⑧ 第二次世界大戦の勃発とコルチャック先生

1939年、ナチス・ドイツがポーランド侵略を開始しすぐに制圧し、1941年暮れまでにはユダヤ人はワルシャワ・ゲットー区域に封じ込められることとなります。実は彼はドイツが侵攻してくる9月の直前8月にはパレスチナへの移住を決断し10月に実行する予定でした。そういった事態ではなくなっていました。コルチャック先生と子どもたちもそこで苦しい生活をします。

危機が迫っていました。彼を救出しようとする計画も何度かありました。しかし 1942 年、ヨーロッパ中でユダヤ人絶滅計画が実行に移されはじめたその年、7 月から 8 月にかけて、ワルシャワ・ゲットーからトレ布林カ絶滅収容所に向けてすべてのユダヤ人の移送が開始されます。コルチャック先生と子どもたちは、そこから収容所へ貨車で送られるための「駅」へ向かいます。これがのちに人々がそう呼んだコルチャック先生たちの「最後の行進」でした。

“最後の行進”のある目撃者が伝えたところによると。

「暑い日差しの日でした。・・・行進する孤児の先頭にはコルチャックが。私はけっしてその光景を忘れない。それは貨車への行進ではなく、ドイツの野蛮に抗する沈黙の抗議です。子どもたちは四列を組み、先頭をゆくコルチャックは両腕に二人の子を支え、眼を天空に向け行進を導きます。・・・」



①

②

③

1940 年代のワルシャワとワルシャワ・ゲットー 1942 年 8 月 5-6 日“最後の行進”のコース この行進の写真は、

『コルチャック先生』映画原作本より

コルチャック先生 最後の選択

④トレ布林カ収容所跡のモニュメント

このとき、先生はどんなことを思って最後の行進をしたのだろう。列車に乗せられる直前までコルチャック先生を助けようとする複数の救いの手があったようにいわれていますが先生はこれらの誘いも拒否して子どもたちと貨車に向かったといわれます。彼は助かる可能性があったのになぜそうしなかったと思いますか。彼の人生を振り返りながら考えてみてください。考えたことを書きましょう。



Blank writing area for the student's response.

写真の出典 ①ハイム・A・カプラン『ワルシャワゲットー日記』上下巻風行社 1994 年, ②http://fcit.coedu.usf.edu/Holocaust/korczaak/kkronika/lastway.htm;E.リングブルム著『ワルシャワ・ゲットー 捕囚 1940 - 42 のノート』(みすず書房), ③A.Holland,Korczaak,1991.Warszawa,c.144.

資料 B 学習指導案

授業日 2015年○月○日(金)○校時○○分
 場所 ◇組 教室 ▽年生
 生徒 ○○中学校 男子○名, 女子○名計○名
 指導者 塚本智宏

1. テーマ・題材名 「コルチャック先生の選択 子どもの人間性と命の尊重」**2. 題材設定の理由と目標(ねらい)**

(題材観) 過去のホロコーストまたそこを生きた人間の生きる選択や道德の問題は、なかなか身近に感じにくいテーマであるが、1.生徒たちからすれば自分たちのことを理解してくれる大人で、しかも子どもを人間として尊重しようとするコルチャックの生涯や思想を学んだ上で、さらに、2.最後の人生の選択において貫いた子どもという人間(そして命)の尊重が生徒に強いインパクトを残し、人間の生き方としてのひとつの範を示す良い教材だと考える。また、中には教育や福祉の仕事に関心をもつ生徒の関心も惹きつけるだろう。

(生徒観) 通常はにぎやかだが授業になると静かで発言が少ない。ただし心の中では自分の人生について、夢や目標を明確にして今後の自分を成長させていきたいという意欲に燃えている。そういった気持ちに応える授業をしたい。

(学習指導要領)との関連・・・指導要領「関連項目 I-④⑤III-②4-④」

(キーワード 人間の尊厳 生命の尊重 正義)

3. 指導計画 例 全体 2時間(歴史と道德授業)

- ・ホロコースト歴史授業— 1時間 (先週1/2)
- ・コルチャック道德授業— 1時間 (本時2/2)

4. 本時の指導**(1) 本時の目標**

- ① コルチャック先生の生涯と思想を通じて、子ども-人間の尊厳を考える
- ② コルチャックの子ども尊重の姿勢や思想に学ぶ

(2) 教材・教具

資料を含むワークシート

提示ポスター (写真資料はPPを利用する)

映画『コルチャック先生』 ポーランド・ドイツ合作 1990年アンジェイ・ワイダ監督

(3) 本時の展開**授業のねらい**

- ・コルチャック先生の生涯と思想を通じて、子ども-人間の尊厳を考える
- ・コルチャックの子ども=人間尊重の姿勢や生き方に学ぶ

流れ	学 習 活 動	教師の働きかけ	留意点
<p>導入</p> <p>(5分)</p>	<p>資料① コルチャック人物の写真を見る</p> <p>やさしそうな人・・・</p> <p>楽しそうな人・・・</p> <p>資料② 外科・内科・産婦人科・小児科・その他</p> <p>小児科? (・・・子ども)</p> <p>ひょっとして 子ども好き?</p> <p>ヤヌシュ・コルチャック(1878-1942) ←板書</p> <p>子どもの権利思想のフロンティア ←板書</p> <p>自分のノートに書かせる</p>	<p>ワークシート(と資料)の配布 p.1,2</p> <p>今日は、コルチャック先生というポーランドで有名なドクターお医者さんで、作家でしかも教育家だった人をとりあげて学んでみようと思う。</p> <p>この人知ってる?????? 写真見てみて、どんな感じの人?</p> <p>この人はドクター・医者でしたが、専門は何科のお医者さんだったと思う?</p> <p>彼は当時『マチウシー世』など子どものための読み物をいくつも書いている。そのことはさておき、この人は、歴史のなかで子どもの権利思想のフロンティアとして世界的に有名な人です。子どもの権利といえば、1989年の子どもの権利条約がありました。この条約の精神とも関係あるようです。</p> <p>さあ、今日はこのコルチャック先生の生涯と人権思想について考えてみよう。</p>	<p>導入のための写真による関心引き付ける</p> <p>板書指示</p>
<p>展開</p> <p>30分</p>	<p>1. 子どもの頃の夢 教育者</p> <p><u>資料③コルチャックの子ども時代の写真を見る</u></p> <p><u>資料④</u> を読む <u>指名して読ませる</u></p> <p>コルチャック先生の人生</p> <p>まずは医者でも、小児科医 確認○つけ</p> <p>2.小児科医 ←板書</p> <p>s.1 給料いいはずなのに信じられない</p> <p>s.2 孤児院ってたいへんそうだと思うけれど</p> <p>3.孤児院の院長 ←板書</p> <p><u>資料⑤</u> を読みながら、説明を聴く</p> <p>子どものことを知りたい ←板書</p> <p>子どもの体だけでなく心のため ←板書</p> <p>s.3 やっぱ子ども好きだったんだ</p>	<p>まず写真資料③を見て。</p> <p>(問い) 彼は貧しい階層の出身ですか、裕福な階層ですか。</p> <p>資料④読んでみましょう。</p> <p>当初は裕福、しかし父の死後、暮らしたいへんになった。</p> <p>発問 コルチャック先生が 8 年ほど小児科のお医者さんをやった後に、孤児院の院長をしないかと話を持ちかけられて、考えた末 1911 年院長になることを決断します(開設 1912 年)。なぜそうしたのでしょ。そのとき考えたことや決断の理由はどんなことだったと思いますか。</p> <p>これはヒントなのですが、資料⑤の a.b.読んでみて。「子どもの偉大なる総合」「魂の彫刻家」って何のことだろう。</p> <p><u>資料⑤の下の解説を読む</u> 説明</p> <p>こうして昼も夜も子どものことを観察し探究できるようになった。さあ、その先生が子どもについて、どんな</p>	

10 分	<p>資料⑥を読む コルチャック先生の思想 子どもは人間として尊重される ←板書↓</p> <p>資料⑦を読む 仲間裁判法典前文 子ども同士の信頼 自分の尊重 ←板書↓</p> <p>コルチャック先生の最後の選択について考える</p> <p>問を考え、想像してワークシートに書かせる</p>	<p>考えを持つようになったか、また、孤児院の中でどんなことを大事にしていたのか、調べてみましょう。</p> <p>問 さあ、ここで、コルチャック先生が子どもについてどんな考えをもっていたのか、まず問い① 見て終わったら問い②を。</p> <p>①資料の空欄にはどんな言葉が入ると思いますか。 ②資料の空欄には何が入ると思いますか。 以上がコルチャック先生の子どもについての考えです。</p> <p>子どもを人間として大事にする、尊重するということが基本でした。</p> <p>ワークシート p. 3を配布</p> <p>さて、コルチャック先生のこの孤児院ですが、当時ポーランドのワルシャワにあって、1939年この国に侵攻してきたナチスドイツの占領下におかれ、ユダヤ人はすべて、街の中心部に造られたユダヤ人ゲットーと呼ばれる区画に閉じ込められ酷い生活を送ることになります。</p> <p>写真資料①を説明する</p> <p>そして、ついに1942年7月20日頃から連日のようにゲットーからユダヤ人が強制収容所へ向かう列車に詰め込まれていくことになります。危機がせまっていました。コルチャック先生は子どもの食糧集めに奔走しつつ、友人や知人から危機を回避するよう国外脱出を勧められたり、彼を救う様々な手立ての申し出を受けることになります。「戦場のピアニスト」の映画に登場したシュピルマンは同じような場を何とか隠れ生き延びました。コルチャックはどうするでしょう。</p> <p>「最後の行進」を写真①②③によって説明し 最後の行進の目撃した人の一人の文章を読む</p> <p>問 この行進は2,3時間から4時間かかったといわれます。このとき、先生はどんなことを思って最後の行進したんだろう。最後の行進が終わるまでも再び彼を助けようとする誘いがあったといわれます。でも彼は子どもたちと貨車に向かいました。彼は助かる可能性があったのですがそうしませんでした。なぜでしょう。彼の人生を振り返りながら、その時コルチャック先生が考えていたことをワークシートに書きましょう。</p> <p>机間巡視をして 考えを拾う</p>	<p>教育者の仕事について考える</p>
------	---	---	----------------------

ま と め 5分	○時間あれば 何人か、書いたことを発表させる。		
-----------------------	-------------------------	--	--

本授業計画・授業案作成の参考文献

- ① 塚本智宏(2004)『子どもの権利の尊重 子どもはすでに人間である』子どもの未来社
- ② 同 コルチャック先生の教育者教育－資料と解説－名寄市立大学紀要 第1巻
- ③ 同 コルチャック先生と子どもの権利『子どものしあわせ』通号 706-708 号(2009,No.12-2010,No.1,2)、44-47,46-49,46-49 ページ。
- ④ 同 コルチャック先生“子ども”の探究 -小児科医であり教育者であること-『保健室』139号 80-84 ページ。

板書計画

ヤヌシュ・コルチャック(1878-1942)	夢	子どものことを知りたい
子どもの権利思想のフロンティア		子どもの体のことだけでなく心のフォローのため
1.子どもの頃の夢 教育者	思想	子どもは人間として尊重される
2.小児科医		子ども同士の信頼 自分の尊重
3.孤児院の院長		コルチャック先生の最後の選択とは?

むすびにかえて

この模擬授業は、教職学生を対象に「道徳教育論」の授業の中で何度か経験してきている。この授業の最後「コルチャック先生最後の選択」において問われている質問で、どんな学生の回答を期待しているのかと問われるなら授業者が期待する回答はもちろんはじめに述べた”ねらい”に対応したものと答える。

まずざっと下記の学生たちの回答下記の資料Cをご覧ください。ここである程度似通った回答を整理して区分(①から⑥の見出しは筆者がつけたものそれぞれ以下は最後の問いに対する学生の回答の引用抜粋)してみたものである。学生たちはおおむね”ねらい”に沿って授業者の期待に応えるように回答している。①で列挙しているように、彼が選択して来た人生の延長戦上に、彼の最後の「選択」(死)はあり、②のように彼は述べた思想のとおりに行動する人格として現れている。そして、⑥のように、とりわけ子どもが望む必要なときに危険が迫りくる最後の瞬間まで子どもと共にあろうとする教育者であり、さらに④のように、決して子どもを裏切らない人物なのである。その姿は、③のように、子どもに害をもたらす社会の前で毅然とこれに立ち向かっているように見える。こうしてコルチャックという人物を最後に到るその思想と生涯において考えると、彼の最後の「選択」は、当然のことであり、そもそも別の選択肢はありえなかったのだとすらいえるのかもしれない。すなわち自らの命のために子どもから離れるという選択そのものが彼の頭には浮かばなかったのではないかとの回答も、例えば⑤のように、在り得るのである。

このように見てくると、この授業は、やはりコルチャックがどのような人生を歩んできた

のかということを知らない者が考える素朴な回答とは異なる結果をもたらしている。その意味で授業は成功している。

しかし、授業者はそもそもこの授業に付している「コルチャック先生の選択」というテーマの妥当性に関して疑われることになる。そもそも彼にはあり得ない選択について、学生とともに考えているということになるのだろうか。いやそうではない、初めからそうであったのではなくコルチャックの人生と思想がその選択をありえないものにしたところに意味があるのではないか。この授業の構想の原点に立ち返らねばならないようだ。皆様の批判とご指導を仰ぐ次第です。

資料C. 授業に対する学生たちの感想文(2014 秋・冬)より抜粋

① 彼の人生・生涯にとって子どもという存在はきわめて大きな意義を持ち、…

・孤児院を持ち、子どもの先生となり、子どもの親となり、子どもが自身の一部になったのではないかと。いざ強制収容所に向かうとき、たすかるかもしれないのに子どもとともに死へ歩んだのは自身の一部や生きる意味をなくしたくなかったためだと思いました。大事なものは死んでも手放したくなくなるのでしょうか。

・コルチャックのどうかして子どもを守ってあげたいという姿勢が見えた。彼にとって「子ども」というのは人生のすべてであったのだと思う。だから自分が助けられる可能性があったにも関わらず自ら貨車に乗ったのだろう。

・子どもを教育するという人生の中でコルチャックは子どもが何よりも大事なものであったのだ。そんな子どもたちが何も知らされずに殺されてしまうのを知っていたコルチャックは、世の中に大切である子ども達と少しでも共にいて安心させてあげようという気持ちが強かったのだと思う。

・彼にとって、子どもは人生そのものであると感じた。そもそも裕福な家庭から貧しい子どもも関係なく教育していたことを考えると、今回の列車の話は納得できます。人生を子どもに捧げ、また、子どももコルチャックを信頼していることもあって難しい選択だったのではないのでしょうか。

・彼にとって、子どもたちは人生を生きるためにとても重要な存在で、子どもを見捨てて生きることはできなかったと思う。むしろ子どもたちと無理やり引き離されなかったことが彼にとって幸せだったのではないかとさえ思えました。

・若いうちに親を亡くし、小児科などで働くことをし、子どもたちの近い存在でいたために最後まで子どもたちと一緒にいたかったのではないかと。子どもの世界に踏み込んだコルチャック先生なので、自分のことより子どものことを優先したのだと思う。

② 彼の思想そのものを表す行動選択 思想と行動

・彼の思想そのものだと思う。自分ひとり逃げることはできたのに、しなかった。それは子どもたちの心のよりどころだったコルチャック先生の生き様そのものの行進だと思った。

・コルチャックは子どもについて研究していた人物。とくに孤児院で子どもたちと接してきて、子どもには尊重される権利があると強く訴え続けてきた。その人物が子どもたちを見捨てるというようなことはできない。最後まで子どもたちといることで、子どもには同じく尊重される権利をもっているのだと主張していたのではないかと。思う。

③ 最後の行進 それは抗議の意思なりを示す 正義の示威行動

・抗議のために先頭に立っていた。彼は人のために勇気をもって行動し、彼自身の意見を明確にもっていたと思う。彼の人生はとても自分に甘くない人生を送っている。

・コルチャックは、ユダヤ人迫害の無意味さ、争いの無意味さを考えながら行進をしていた。彼が子どもの研究をし続けてきたその人生は彼の夢そのものだった。ドイツ側の彼だけをたすけるという言葉は、彼にとって夢そのものを汚されることと同じだったのではないかと思う。

・自分が行動することで、世間が間違っていることに気づいてほしかった。彼は子どもが好きでたまらなかつたんだろうなと思う。

・間違っているということを訴えたかったが、その方法が他にはなかったから、自らの行動で訴えた

・命というのは平等なものなのに、彼が有名というだけで助かるというのは間違っているということを貨車に乗ることで訴えたかったのだと考える。

・このような差別などといった行為をこの時のドイツだけでなく、これからの未来のためにも、自分は助かるかもしれないが、未来のことを考え、自分の命よりもこれからの未来を優先して差別をなくそうとしていたと考えていたと思う。

④ 子どもの信頼を裏切らない

・先生が助かる道をもし選択していたら他の子どもたちをもしかしたら助けることができたかもしれない。しかし助かる道を選択しなかったのは、目の前の子どもたちを見捨てることができず、もし見捨てていれば大人を信じることができなくなっていただろう。

・子どもを尊重し、孤児たちに降りかかる脅威にコルチャック先生は最後まで人種を問わず子どもたちの味方でいたかったのだと思う。彼は助かる可能性はあったが、一緒にいた孤児まで助けられなかった。子どもを見捨てて教育者としての誇りを捨てることを拒否したため、生涯教育者としての死を選んだのと私は思う

・今まで医師という仕事をなげうってまで子どもたちと向き合ってきた自分の信念は決して曲げられないという気持ちがあったのではないかと思う。

⑤ そもそも彼らの選択枝に自分だけ助かるという選択は生まれなかった。当然のことをした。

・彼は小児科医の先生や孤児院の院長など子どもに携わる仕事をし、子どもの権利などを考え、主張していた人生だった。そのため、これから死んでしまうかもしれない子どもたちを前にして自分だけ助かるというような選択枝は彼の中には無かったと思う。

・子どもを守る、子どもと共に一生を過ごそうと思っていたから。コルチャックには自分だけ逃げようとか自分だけ助かろうとか、一瞬たりとも思ったことはないと思う。子どもが好きだったから。大人が子どもを守るのは当たり前だと思っていたから。

・子どもを愛する、尊重するというコルチャックの考えから、また、深いところで先生たちと子どもの間の信頼関係をつくるということから、コルチャックは一人で列車に入るという選択をせずに子どもたちと貨車に向かったのだと思います。

⑥ 子どもを助ける・そばにいる・最後まで一緒に

・上等な服を着せたのは、彼の最後の愛情だった。死にたくない気持ちも当然あっただろうが、それを表に出さず平然とした様子で歩くことは普通はできない。彼は自分だけ助かることを拒否した。子どもたちにとっては、彼は親のような存在であった。さらに彼は心の教

育に力を注いでいた。最後まで子どもたちに寄り添うことが最後の「心の授業」だったのかもしれない。

・子どもを助けることを考えたけれど、子どもを全員助けることはできないしもし何人か子どもを助けられたとしても、その子たちにコルチャックがつくと助けられない子どもたちが不安がるし、逆に助けられない子どもにつくと、助ける子どもが不安がると思い悩み、最期まで子ども全員の側にいることを選んだのだと思う。

・自分を犠牲にしてまでも、子どもたちを守りたい。一人でも多く助けたいという一心から自分への助けを拒否して列車に乗り込んだ。

・コルチャックは最後まで子どもたちといることによって、今までの人生で多くの子どもたちと関わってきたことを思い出し、助かる可能性よりも最後の最後まで子どもたちと一緒にいることを選んだのだと思います。

参考文献・論文

1. 塚本智宏(2004)『子どもの権利の尊重 子どもはすでに人間である』子どもの未来社
2. 同 コルチャック先生の教育者教育—資料と解説—名寄市立大学紀要 第1巻
3. 同 コルチャック先生と子どもの権利『子どものしあわせ』通号 706-708号 (2009, No. 12-2010, No. 1, 2)、44-47, 46-49, 46-49 ページ。
4. 同 コルチャック先生“子ども”の探究 —小児科医であり教育者であること—『保健室』139号 80-84 ページ。
5. 教材写真、最後の行進は以下より(行進地図は作成)。①ハイム・A・カプラン『ワルシャワゲットー日記』上下巻 風行社 1994年, ②<http://fcit.coedu.usf.edu/Holocaust/korczak/kkronika/lastway.htm>; エマヌエル・リングエルブルム著、ジェイコブ・スローン編『ワルシャワ・ゲットー 捕囚 1940 - 42 のノート』(みすず書房), ③.A.Holland,Korczak,1991. Warszawa,c. 144.

(受付:2015年1月31日, 受理:2015年2月27日)